

『月報』一九七一年四月  
(神奈川県教育委員会)

### 三題噺

矢口新

#### 宮本武蔵

宮本武蔵がどれ位の剣客かは人によつていろいろな意見があるが、ともかく一つの人物であったことは確かである。そのことはともかく、彼には師匠がいなかったといわれるが、これは面白いことである。

われわれは、人間が人間を教育するということを通じて疑われないが、宮本武蔵のような人には、教育者がいなかった。親はなくても子は育つというが、師はなくとも人は育つと言えそうではないか。

彼は一生の間六十数たび試合をして負け

なかつたといわれているが、もし負けていれば当時の試合は、生死をかけたものが多かったのだから、晩年の彼はなくて死んでいたのであろう。勝ち残つて生きたわけである。しかし勝ち残るためには、おそらくあらゆる神經を使つて試合に臨んだであらう。生死を賭すなどと言つて言うが、それが明日に迫つて来たとき、精神はどれくらい平静であつたらうか。落ちていて平常とかわらぬ態度を持するまでになるには相当な克己心が働いたであらう。それが彼を一つの個性的な人物にくくりあげていったにちがいない。そういうことが彼をつくりあげたということは、生活が彼をつくりあげたということであらう。真剣な生活が彼を彼にまでつくりあげた。

巖流島で彼は舟の櫓を切つて木刀がわりにしたといわれている。あの重たい櫓を瞬間の速さで相手に振りおろすには、余程の修練があつたにちがいない。それは彼の日常の修練の結果であらうが、その修練が、そのような策戦を生み出したとも言えよう。そこにも師匠があつたわけではないのである。

われわれは人が人を教えるなどということとは当たり前と思つて、教育者がいなければ教育は成立しないなどと思つているが、果し

て、そうであらうか。それは錯覚ではないか。本当は、ものが人を育て、事実が人を教えるのではないだろうか。武蔵は自ら死地に入るというやり方で勉強した。自己をみがいたのである。その時彼を育てたものは、たとえば毎日木剣を振る場では、木剣であつたらうし、向こうの木立に向かう時は、その木立であつたにちがいはなからう。試合に臨めば、試合の相手の動きが彼に相手をよみとることについて体得させたにちがいない。そして恐らく、師匠が居ても、師匠はそれを教えることはできなかつたであらう。若し師匠が教えることができたら、師匠が試合の相手になることであらう。師匠が到達している所へ弟子を到達させることは師匠ではなく、弟子の修練である。つまり人間は自分で育つのではないか。

どうも師匠はいらないという結論になりそうである。しかし木刀を振るうときには木刀が、木立に向かうときには木立が、試合に臨むときには試合の相手が師匠であるとすれば、師匠はやはり必要欠くべからざるものである。つまり師匠のあり方がちがうのであろう。

現代の教育者は、師匠としてこういうことを考えたことがあろうか。現代の師匠は自分

が弟子を教えるという考え方にとらわれすぎてはいないか。弟子は師から直接学ぶのではなく、何かの経験を通じて学ぶのである。その経験を準備するのは師である。弟子にどれだけの修練をさせるか、それを考えるのが師であつて、師匠が自らの知っていることを教えることができると考えているのは錯覚ではないか。

現代の教育は師が表に出て、弟子を真剣に働かせる場をつくらなくなってしまった。弟子は師の言葉を聞いていることが多くなつて、真剣に自分の目の問題に対決しない。それでは人間は育たないのではないか。現代の教育者には、自分が教えるという思いあがりがあるのではないか。ここからもう一度考え直してみたらよい。学級に対して教師が教えるとき、どれだけ弟子を真剣に働かそうとしているだろうか。

## 職場

昔、寺小屋の師匠は、その方法は素朴であつたが、一人一人の弟子どもを見て、何をやらせるかを考えたものである。昔は入学の時期がきまつていたわけではないから、一緒に入学するというようなことはなかった。従つ

て学級もつくられていたわけでない。一人一人が師匠から手本を書いてもらつて、それを練習するのである。草紙に書いたものを持つて師匠の所へ行くと、師匠はそれを見て、直してやつたり、次に書くことをきめて、手本を書いてやる。そこには極く素朴ではあるが、師匠は弟子の一人一人を見つめるといふ構えがあつた。しかも一人一人に対して具体的にそれを実行するという場があつたわけである。

現代の教師は、学級を相手にするという場におかれていいるから、一人一人に気を付けるつもりでもなかなかそうはいかない。そうはいかないばかりでなく、実は根本に違つたものがある。それは弟子の一人一人に何かをやらせようとする構えではなく、知識を与えようという構えになつていいることである。この構えは実は、百年來われわれがつくつて来たことで、そこに大きな問題があつたのである。百年來の教育のやり方には大きな欠陥があつたということである。

欠陥があつたにかかわらずここまでわれわれの社会は発達して来たではないかという人がいるかも知れない。その通りであろう。教育が社会の発達をつくつて来たかどうか

はあやしいことであるが、そうだとすると、その教育はむしろ学校の教育ではなく、職場に入つて仕事を真剣にすることによる教育であつたとみる方がよさそうである。

若し学校の教育がそれに役立つとするなら、先生のことをよく聞くという習慣がつくられて、それが職場で先輩の意見をよく聞いて、仕事をするという態度をつくり、その仕事をする事の中から、仕事のできる人間がつくられたのではないだろうか。

仕事の間には強い伝統があつて、学校を出たばかりの粗野な人間も、立派な仕事の間で見ちがえるような人間になつていく。職場の人間形成力というのはどうしてなかなか大したものである。学校で教えていることなどはそれを見るときにはがゆいということになる。学校の教育は甘やかされていいるという他はない。職場の仕事は、教育ではないと思つていいるが、実は大変きびしい教育なのである。

きびしいということは、決して備われていいるなどということではなく、責任のある仕事をさせるといふことなのである。責任のある仕事をする場に置かれるから、真剣になり、その真剣な行動が人間を育てるのである。

学校で教師の話聞いて覚えるという構えが、いくら真剣になれといってもなれないものをもっているであろう。

言葉というのは、やはり無責任なものなのである。

## 情報

情報化社会とか情報時代とか言われ出した。情報というのは現代人にとつてはとても分りやすい言葉であろう。何しろ学校で教えられた内容というのが殆んど情報といつてよい。つまり学校は情報を与える最大の場所であつたといつてよい。

しかし情報というのは、本質的に無責任なものではないか。という意味は、それを受けとつたものにとつては、ただ受けとることである。聞き流すなどというのがそれである。それが意味があるのは、何かをする場に置かれたときである。真剣に何かをしようとするときは、目を皿のようにして見るというが、それは、情報を探すということであろう。情報は探されるものであつて、ただ受けとるものではないのである。

宮本武蔵が立派に育つたのは、真剣の場に

置かれて、自ら情報をもとめて、それをさぐす能力を育てたからである。敵の一挙手一投足に即座に反応して、瞬間の行動をとるのは、情報をとり、反応する行動力が形成されたのである。そういう情報の位置づけがなくては、情報などというものは害をなすといつた方がよい。

こう考えて来ると、情報は自らの眼でとらえるものである。そういう能力が人間に必要なということ現代の社会は示しているのではない。公害というのは、民衆が自らの眼で情報をさがす能力が育てられなければ、除去することはできない。物価を下げるには、消費者が物の流通について正しい情報をとらえて、反応しなければならぬのではない。政府や産業の出した情報をただ受けとつては、とても正しい反応はできない。つまり、社会的な情報について、宮本武蔵のような鋭い眼をもつ人間をつくらなければ、人間どもは自己の生存を保つことはできないという時代になつて来たといふことである。

考えてみると、人類は昔から正しい情報を探して来た。それが人間を育てて来たのである。たとえば、長い間孔孟の教えやキリストの教えが人を導いて来たが、孔子や孟子やキ

リストは自らの眼で現実の姿を正しくとらえ、真実のあり方を求めたのである。その情報をただ言葉として受けとつて限るのは、人間はそれ以上賢明にはならない。キリストの教えもある時代には害をなす。天動説は人間をごまかしていたが、コペルニクスの転換がおこなわれる時が来た。この情報は真剣に自然の姿にたち向かつて情報がとられた結果である。

正しい情報をとらえ、反応する人間が必要なのである。それは宮本武蔵の時代にもあつたことなのである。寺小屋の師匠にもあつたし、仕事の場にもあることなのである。学校の教育がそういうものから離れて生命をなくしてしまつていのである。それが、教育が転換を迫られている理由である。(丁)